

教師力高め STEAM教育推進

各教科等 関連付けるシート開発

従来の授業観を変えようと、STEAM教育の視点で教科等横断的な授業づくりに取り組む大阪教育大学附属天王寺小学校（中野知洋校長、児童626人）。その先に見据えるのは、子どもたちの成長や学びの充実だ。「Try STEAMシート」（STEAM教育の実践向け）などを開発し、教師の力量アップに向けた取り組みは教育関係者から好評だという。同校は（公財）パナソニック教育財団の特別研究指定校の一つ。指導・助言を行う田村知子、同大学教授のコメントと併せて紹介する。

大阪教育大学附属天王寺小

同校が初めてSTEAM発を手掛けた。しかし、コロナ禍の時期と重なり消化年度。STEAMとは、科不良のまま終了。教科教育や数学など五つの英語の充実を目指す方向性に戻ったという。語の文字を組み合わせた造ったという。再び浮かび上がった。課題は、児童一人一人が持つ。こうした実態などを踏まえ、「プログレスシート」

知識・経験の差 埋める手だてに

の激しい社会の中で、今起きている問題に立ち向かう児童を育てたいと考えていた同校。再びSTEAM教育に着目し、各教科等の学びを生かした課題設定の工夫などに力を入れた。その時代の社会情勢などを踏まえ、「今年はこれがベスト！」と思える授業づくりに目指している。

教科固有と横断の視点 共に重視



「Try STEAMシート」には、A4用紙1枚

田村 知子
大阪教育大学教授

に大切なことが詰まっている。例えば、関連付ける複数教科の目標を明記し、それらを関連させることで期待する子どもの学びの姿を具体的に描くことを求め、教科固有の視点と教科等横断の双方を重視している。

同校は毎月15日をSTEAMデーとし、教員が自らの実践を披露する場になっている。保護者や地域にも開かれ、創造的・協働的な学校文化が築かれている。

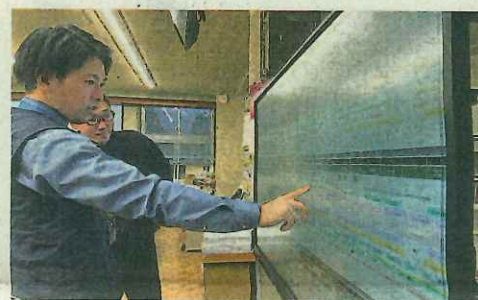
また、電子黒板を用いた単元配列表の使い方も秀逸である。アイデアや実践が増え、単元配列表は成長し続けている。

目標明記、期待する学びの姿 具体化

（A4用紙1枚）を開発した。プログレスには、「教師のプロを目指す」「進歩する」の二つの意味が込められている。教師自身が今抱える問題意識を明確化し、授業でどう改善したいのかをまとめていく。その経験を積み重ねることで、授業力を高めることがねらわれた。

同シートは、研究授業当日の朝までにコミュニケーションアプリ上に提出すれば問題ないというルールになっている。空き時間の教員は授業を参観し、アドバイスを含めて自身の体験談を話すようにしている。

STEAM教育用もある。各教科等と関連を図り、STEAM教育の実践内容をまとめる「コンセプトシート」（A4用紙1枚）と呼ばれるものだ。まずは学年主任や同校の勤務年数が長い教員が作成し、各学年で理解を共有。「教科の統合度合い」で異なる三つのアプローチを設け、授業者が授業の目的・内容で選ぶことができる。これらは教員間の知識・経験の差を埋める手だてになっている。



電子黒板は職員室と会議室に設置（2台のデータはクラウド上で共有）。タッチパネルで操作もしやすいという

ターニングポイントになったのは、研究助成金を使い、昨年度の夏ごろに電子黒板を2台購入したこと。1台は職員室に設置し、全校児童の出席・体調の確認などができるようになった。画面を見ながら話をする教員の姿を見て、研究部長の國光妙子主幹教諭は「新しい職員室の文化になっている」と話す。それと併せ、大型用紙で作成した単元配列表もデジタルに移して「使いやすいから、まずやってみよう」という気軽な気持ちで臨んでいると話した。

1・3年生が交流するトリオタイム（毎日15分）、STEAMデー（毎月15日）の設定など、コロナ禍時に始まった取り組みも研究の下支えになっているという。

2月に授業公開
研究2年目を迎え、STEAM教育の実践を増やすことが課題だった。そこで新たに「Try STEAMシート」（A4用紙1枚）を開発。「トライ」という言葉の通り、北井陸人教諭（同校2年目）は「失敗してもいいから、まずやってみよう」という気軽な気持ちで臨んでいると話した。

同校は2月6、7の両日に「授業づくりの会」を実施し、STEAM教育の授業などを公開する。参加費は2千円（学生千円）。締め切りは2月2日。

附属天王寺小 06・6621・0123